

高野参詣道(三)

本号では前号に引き続き、高野参詣道についてご紹介いたします。御霊神社を東へ徳田方面に向かう主要な高野参詣道は、徳伝寺の前を通り、金屋橋へと至ります。

金屋と徳田を結ぶ金屋橋は、金徳橋とも呼ばれ、古くから交通上重要な場所でした。橋が架けられる以前は川舟で渡り、明治二十一年(一八八七)に木造の橋が完成するまでは、「むかで橋」と呼ばれる仮橋が架けられていました。橋が架橋されてからは、洪水による流出と架設が繰り返され、現在の金屋橋は水害後の昭和三十年に架け替えられたものです。

写真①は、今から約百年前の金屋橋を南側から撮影したのですが、橋の北詰には数件の旅館やムクの木があり、かつての面影を知ることができます。また、旅客の送迎に使用されたのでしょうか、当時としては大変珍しい自転車



で人力車を引く男性が写っています。

金屋橋の北詰にあるムクの巨木は、室町時代ごろに若苗が流れ着いたものが南北両岸に育ち、夫婦樹、兄弟樹として親しまれていました。しかし、南側の木は切り倒されてしまい、その後たびたび災厄が起こったので、根を掘り起こして供養をしたところ、災厄は治まったという伝承があります。金屋の渡しの標木のよう存在するムクの木は、数百年にわたり金屋橋を行き交う人々を見つめてきたことでしょう。

ムクの木は北側の交差点にある金屋熊野十二社の境内には、安政六年(一八五九)に建立された道標があります(写真②)。この道標は、高さ一八〇センチメートルを測る立派なもので、正面には「右龍神・粟生・四むら谷道、左いせ・紀三井寺道」と刻まれ、側面には「右久満(くま)の・ゆあさ・上日高道、左山上(大峰)・か(こ)うや・西ヶ嶺如来道」とあり、東西南北の各方面へ至る道案内が刻まれていることから、この場所が街道の結節点であったことを物語っています。

